

『丸山眞男座談』に戦争と平和を「聞く」(上)

植村秀樹

はじめに

一 丸山眞男と座談

二 座談を「聞く」

(一) 終戦から安保まで (以上、本号)

(二) 安保から退職まで

(三) 補遺——その後

三 考察——何が「落ちた」のか
おわりに

はじめに

「丸山病、とでも呼ぶべきものがあるように思う。」^①

丸山眞男の評伝を書いた荊部直はこのような書き出しでそれを始めている。崇拜と呼びたくなるような熱烈な支持と礼賛の一方で、丸山が多くの厳しい批判の声にさらされてきたことは確かである。「丸山を批判する言説が一樣に帯びる、独特の熱気」を荊部は「丸山病」と呼んだのであるが、賛美の声にも「丸山病」とでも呼ぶべきものがあるように筆者は感じてきた。^② 病気と呼ぶほどかどうかは置いておくとして、戦後民主主義あるいは戦後思想を語るうえで、丸山は賛否いずれにおいても、最も論議を呼ぶ存在であることに異論はあるまい。戦後思想の関が原、いや、摺鉢山（硫黄島）に相当するとしても譬えてみたくなるのが丸山眞男である。関が原は文字通りの天下分け目の決戦であるが、摺鉢山は実際の勝敗を決する分岐点というよりシンボル争奪の要素が大きかった（だからこそ、山頂に星条旗を立てた時の写真は大きなインパクトを持った。奪取すべき軍事上の目標は飛行場であった）。丸山個人の思想というより、それが象徴する日本国憲法をはじめとする戦後体制、または戦後民主主義と呼ばれる何物か、あるいは「進歩的知識人」と呼ばれる何者か——が批判の本丸であるのであろう。丸山礼賛はその逆にそれらへの支持ないし称賛である（それとともに、個人崇拜の色彩も時折感じられるが）。いずれにしても、丸山をめぐる論議が「独特の熱気」を帯びることに十分な理由があるというべきであらう。

筆者はこれまで主に戦後日本の再軍備過程とその後の防衛政策、日米安全保障関係の展開などについての実証的研究に取り組んできた。また同時に、戦後日本の平和論にも関心を持ち、それに関連する論考も発表している。^③ これらの研究との関係でしばしば戦後知識人の平和論に言及してきた。平和を唱えることに異論がある

わけではないし、日本国憲法第九条が生まれた所以もその意義も認めるのにやぶさかではないが、しかしながら、平和論にはしばしば疑問を感じ、説得力を感じないことも少なくなかった。戦後の平和論を論じる際に必ずとつていいほど言及される平和問題談話会の「三たび平和について」(『世界』一九五〇年十二月号)第一、二章を執筆したのは丸山であるが、この文章にも何かしら空虚さのようなもの——と言って悪ければ釈然としないもの——を感じたのである。それは、その後を知っている者の歴史の後知恵的な感想にすぎないのか、何らかの理由のあるものであったのか、自分でも判然としておらず、それが何なのかをいつか明らかにしたいと考えてきた。本稿は、戦争と平和に関して丸山が語った——対談や座談会などで文字通り語った——言葉を手掛かりとして、丸山に接近してみようという試みである。その上でこれまで読んできた丸山の論文を再検討する必要がある。したがって、求める答えはこれだけで得られるわけではなく、本稿はあくまで「解答」へ接近するための作業の一部をなすものである。

一 丸山眞男と座談

丸山論はこれまで数多く書かれてきた。^④丸山の狭義の専門たる日本政治思想史の研究に関するものも少なくないが、その多くは丸山を思想家と捉えての礼賛なり批判であり、その焦点は主に丸山のファシズム論、デモクラシー論である。しかし、筆者の関心は以上のいずれにもない。丸山を思想家と呼ぶべきかどうかは疑問が^⑤あり、日本政治思想史は筆者の研究領域を超えている。「はじめに」で述べたように、筆者の関心はあくまで戦後日本の安全保障にあり、したがって戦争と平和に関する丸山の言説である。そうしたものを一括してとりあえず平和論と呼んでおこう。

丸山の平和論に筆者が感じた空虚さのようなものはどこから来るのか、という漠然とした疑問に示唆を与えてくれたのが、丸山を批判的に捉えているひとりでもある、哲学研究者の長谷川宏である。長谷川はその著『丸山眞男をどう読むか』の中で、丸山の「軍隊への嫌悪感」について、「軍隊ぎらいの感情が、軍隊で出会った異質のもの——丸山眞男のいう『大衆』あるいは『国民』——にたいする知的理解を封じてはいはないか」という問いを投げかけている。⁶⁾長谷川がこのような疑問を持つのは丸山の次のような発言からである。

本当に「軍隊を」経験した人ならば、いかなる形でもあれ、日本が軍隊を持つということはまっぴらだ
という、全人間的な反発感情があるのが、当然じゃないかと思うのです。抽象的な議論としては、「軍隊
の必要について」いくらでも言えるけれども、ぼくはどんな場合でも軍隊は御免だという感じだナ。⁷⁾

これは『思想の科学』（一九四九年一〇月）に掲載された「日本の思想における軍隊の役割」と題する座談会での発言である。丸山のほかに飯塚浩一と豊崎昌二が参加しており、いわゆる鼎談となっている。終戦から四年ほど過ぎているとはいえ、辛い体験の記憶が生々しいことがこの発言からうかがえる。さらに長谷川は、次の発言を引用し、疑問を深めている。

軍隊の居心地がよかったというような話があったけれど、ぼくはやっぱり軍隊ほどこいやなところはな
かったって言うよりほかないし……。いま愛知大学にいる副島種典さんが上等兵で別の隊にいましたが、
八月の十六日から十七日頃に顔を合わせて、『どうも悲しそうな顔をしなければならぬのは辛いね』と話
し合ったのをおぼえています。事実の通り、当時の気持を語れっていわれたらそういうよりないんですよ。⁸⁾

これは一九五八年の「戦争と同時代——戦後の精神に課せられたもの——」と題する座談会における発言である。他に宗左近、橋川文三、矢内原伊作らが出席している。⁽⁹⁾これらの発言を受けて、「知的社会」に住む丸山は「民衆の社会」と「切斷」されており、後者を理解できないのではないかと、というのが長谷川の分析である。また長谷川は、「(丸山の提示する)一般兵士の像に血が通っていない」とも断じている。⁽¹⁰⁾長谷川の批判も苜部のいう「とにかく丸山を叩かなくては気がすまない怨念」を帯びている部類のものかどうかはともかく、筆者が丸山の平和論に感じた物足りなさは、長谷川のいう「一般兵士の像に血が通っていない」こととも無関係ではないのではなからうか。もしかしたら丸山は、兵士にとどまらず、軍隊一般、ひいては戦争そのものに対する十分な「知的理解を封じ」たままで平和を論じていたということはなかつたであろうか、という疑問が頭をもたげてくるのである。

この疑問に対する答えを求めするために、先の引用だけから直ちに長谷川のような結論を導き出すことには、ひとまず慎重でありたい。だが、筆者の興味を引くのは、これら批判の対象となっている丸山の発言の多くが文字通りの発言——座談会における——であるということである。丸山は無類の能弁で知られ、「対話や座談も最初のうちはともかく、途中からは必ず丸山眞男の独演会になる」といわれたほどである。⁽¹¹⁾「日本三大おしゃべり」のひとつりとの自覚を持った丸山は、対談や鼎談を含め多くの座談会に出席しており、その大半が全九冊におよぶ『丸山眞男座談』に収められている。日本政治思想史を専攻分野としつつも、むしろ時事的な評論が注目を集め、戦後を代表するいわゆる「進歩的知識人」の代表のようにと見なされてきた丸山は、座談の場でのような発言をしていたのか。

一般論でいえば、人は書くという行為においては慎重になるだろう。そもそも書き始める前に情報や思考を整理しなければならぬし、一旦書き上げた後に推敲によって表現等を書き換えることもあるだろう。しかし、

座談会における発言は、活字にする時点で多少手を入れることはあっても、その表現や話の中身を完全に書き変えてしまうようなことはまずしないものであろう。それが、長谷川が引用し批判したような発言となつていると考えられる。

人は「問うに落ちず、語るに落ちる」というが、そうであるならば、丸山の場合もやはり、「語るに落ち」たものがあるかもしれない。そこで、「座談の名手」とされる丸山の対談や座談会での発言から、軍隊・戦争・平和に関するものを拾い出し、その戦争論、平和論へ接近する手掛かりを探ってみよう。「米軍の日本駐留と日本自主武装の双方を原則として否定するほかに、丸山が防衛政策論にふみこむことはなかった」と荻部はいう⁽¹⁴⁾。管見の限りでもそのとおりであるが、荻部が周到な研究に基づいて書いているのだから、その言を信頼して間違いないであろう。また、松本健一の研究によれば、「丸山は『日本国憲法』にいわば『戦後精神』をみた。それはしかし、主権在民の思想、あるいは人民主権の精神においてであつて、『戦争放棄』や『武力の不保持』といった憲法第九条に関わるものではなかった⁽¹⁵⁾。ただし、「すくなくとも、六〇年安保闘争の渦中までは、なかった」と松本はいう。これはきわめて重要な指摘であり、後であらためて検討したい。

丸山の専門はあくまで日本政治思想史であり、丸山自身の言葉を借りて言えば「本店」ではなく「夜店」にすぎない時事的な評論の部類に属する平和論が十分に展開されていないとしても批判にはあたらな⁽¹⁶⁾いが、それでもやはり戦後の平和論の形成と展開に小さからぬ影響力をもつた丸山の戦争観、平和観を等閑視するわけにはいかない。それどころか、丸山を理解することは戦後の平和論を理解するために必須の一要素である。そのため、論文のような形でまとめた議論を展開してはいなくとも、座談における発言から見えてくるものを探つてみたい。それが丸山の平和論の一端を理解する手掛かりになるにちがいない。

座談での丸山の発言の中には、吉本隆明を激怒させた次のようなものもある。六〇安保闘争を担った者を丸

山は「政治的ラディカルというより、自分の精神に傷を負った心情ラディカル」と呼び、次のように冷たく言い放った。

その心の傷は、ある場合には党生活のなかでの個人的経験に根ざしているし、ある場合には戦中派の自己憎悪に発しているし、ある場合は、俺は一流大学を出て本来は大学教授(?)とか、もっと「プレス・テッジ」のある地位につく能力をもちながら、「しがない」「評論家」や「編集者」になっているという、自信と自己軽蔑のいりまじった心理に発している。⁽¹⁷⁾

この発言は、丸山のエリート意識がまさに「語るに落ちた」ものというべきであろう。これに対し、吉本が「形式論理の言葉で政治思想を述べるときは一応読ませる文章を書くこの男の内部に、どんな下司びた心情がかくされているかを語る好適な素材」と厳しく論難したのも、むべなるかなである。故なき論難とはいえないであろう。⁽¹⁸⁾このように、論文の文字面にはなかなか表れない丸山の一面を探るには、座談での発言はもつてこの材料となりえよう。

しかしながら筆者は、言うまでもないことではあるが、座談における発言だけで先の大きな疑問への解答を得られると考えているわけではない。それどころか、片言隻句にとらわれて思わぬ誤解をするおそれがあることは重々承知している。これまで筆者は丸山の著書や論文として発表したものをいくつか読んできたが、座談における発言を「聞く」ことで、書いたものだけからではうかがい知ることのできない丸山の一面に迫ることができると考えている。そして、それが丸山の平和論を理解する上でも有用なものとなりうるであろうと期待して、とりあえず、その作業に取り組んでみることにする。したがって本稿では『丸山眞男座談』を中心に据

えているが、本稿の目的はあくまで文字通りの発言から丸山の軍隊観、戦争観を探り、その平和論の背景に迫ることである。最後の「考察」において『丸山眞男手帖』『丸山眞男書簡集』『丸山眞男集』なども適宜参照する。なにはもとあれ、まずは丸山の話に耳を傾けることにしよう。

二 座談を「聞く」

(一) 終戦から安保まで

丸山が座談会のなかで軍隊体験について最初に言及したのは、一九四九年六月の『知性』に掲載された「日本の軍隊を衝く」である。大岡昇平、亀島貞夫、野間宏との四人による座談会の冒頭で丸山は、次のように問題提起した。

ミリタリズム、あるいは軍隊組織少くとも近代国家の軍隊組織というものには、やはり或る共通した特色なり、構造なりがあるのじゃないか、一度そういうものを抽出してかからないと、日本の軍隊だけの特色だと思っていたことが、案外そうでなくて、軍隊という一つの明確な目的を持った団体組織の機能から必然的に生れてくるところの特徴なのだということもありうるのじゃないか。⁽²⁰⁾

さらにこの座談会では、軍隊内部での私的制裁について話題にしており、「私的制裁の、非常に変わった類型みたいなものを一つ挙げたらどうですか。そうすると、そこら辺から日本の特色が出て来るかもしれない」と発言し、私的制裁からも日本軍の特徴を探ろうとしている。また丸山は「軍人というカストが社会の劣等感を

持っている人々に自信を与える。つまり自分の生れとか、富とかいったもので、社会的優越を味わえないものも、軍国主義社会では、社会的な、名誉を受ける道が開かれている」と、近代国家の軍隊の特徴を捉え、これが私的制裁を生む背景となつてると指摘している。

徴兵令は明治政権が自分の政治的な基礎を確立するために、旧武士階級の反抗を抑え、更にその基礎にある農民の反抗を抑えなければならぬという非常にハッキリした意図で出来たわけですね。徴兵令によって、武士という特権階級がなくなつて、百姓や町人が兵隊になれるということ、大いにデモクラティックな看板を掲げて軍隊組織を作つたのですが、(中略)明治政府の軍隊を構成していた者には、無法者、ならず者という種類の人間が、相当多かつたのじゃないか。それでそういう社会に行われていた秩序維持の方法が、やはり軍隊の中に持込まれていったというふうにも考えられるんですがね。

徴兵制という近代国家に特有といつてよい「デモクラティックな」要素の指摘と、「無法者、ならず者」も少なくななく、それが私的制裁というかたちで組織の秩序維持につながつた、という当時の日本社会の分析を行っている。そして丸山自身の体験を次のように語っている。

ぼくは内務班にはじめて入つたときの第一印象は、軍隊は伝統の蓄積だということ。その伝統の重圧感には全くまいった。整理箱なんか見ると伝統が空間的に堆積しておると感じました。

自身が入営したときの体験から、これを「精神主義の反対物への転化は、一方、形式主義に転化し、他方

は物質主義に転化する」とまとめているが、⁽²⁵⁾ここではあくまで軍隊の観察にとどまっている。

次に「日本の思想における軍隊の役割」と題して『思想の科学』誌上で行われた鼎談でも丸山は、先の座談会と同様、「軍隊はいちおう徴兵制をとったもので、擬似デモクラシイ的な基礎を持っており」と、徴兵制のデモクラティックな側面に触れ、そうした「擬似デモクラティックなもの」が軍隊への親近感を国民にもたせた」と評価した。「擬似」ではあれ「デモクラティック」であったがゆえに、「日清、日露を経て軍隊の社会的な信用が高まった」のである。⁽²⁶⁾ここには徴兵制をデモクラシーとの関係で冷静に捉える政治学者の目で軍隊を見ている丸山がいる。続く発言に注目したい。

「だいたいにおいて言えば軍隊は対外戦争のためということになった。そうして、日本が次々と成功的に遂行した戦争によって社会的な不満が外にそらされたわけです。不満が日本の支配階級に向かわず、日本帝国が弱いからわれわれがミゼラブルになるんだ、それだから日本を強くしなければならぬという意味において排外主義の方向に向けられたわけなんです。そこで軍隊というものは自分を抑圧するよりも、むしろ国家の中に投影された自我を防禦、いな拡大してくれるようになったのだと思います。第一次大戦以後のデモクラシイの勃興と共に軍人が評判がわるくなったが、そのときに日本の軍部は自己保存策として、軍隊が日本の社会集団の中で一番デモクラティックなものである、それは国民的な基礎を持っているということ強調したと思うんです。天皇の軍隊ということは最近の段階になってから強調されたことであって、その前には、むしろ、日本の軍隊は国民の軍隊である、外国の軍隊は貴族の軍隊だが、日本の軍隊は本当の国民の軍隊であるということ強調していたという点もあるのじゃないかと思えます。⁽²⁷⁾

ここに丸山の近代日本の軍に対する見方がよく表れているように思われる。さらに丸山は、「だから軍隊イデーといえますけれども、天皇の軍隊という観念は潜在的には一貫して存在していたが、それが特に強調されたのはむしろ最近の段階であって、皇軍という言葉はわれわれの慣用語になっておりましたが、あの言葉は荒木貞夫がやらせた言葉で、それまでは国軍と書いていたわけです²⁸⁾」と、「国軍」が「皇軍」に変化したのは最近のことであったとの理解を示している。「軍隊の階級というのは、社会上の階級とは全く別²⁹⁾」であり、それが「日本の軍隊の擬似デモクラティックな要素」となっていることを強調している。

海軍では大学出などの知識階級を重んじていたという豊崎の発言に対して、丸山は陸軍では異なっていたと述べている。

その点は陸軍の場合だと二重の心理があるんです。表立っては軽蔑するが、内心は畏怖を感じるというおとです。それが大学出の兵隊に対する二重の態度になってきています。いじめながら、しかも一方では絶えず劣敗意識を感じているという二重の反応が出ていました。³⁰⁾

このように常に政治学者の目で軍隊を見ている丸山であるが、わずかに人間的な側面に触れた発言も聞かれる。しかし、これもあくまで体験の観察にとどまっており、それ以上のものではない。

軍隊の内部でよかったことは一般化できないけれども、ほくらの場合を考えると、休暇のときに一緒に戦友とどうこうしたとか、演習の休憩のときに軍歌をうたったとか、実に小さな些細なことが、あの砂漠のような生活の中で、オアシスのようによいものに感じるんです。それが堆積して大きな力になっ

て独自に印象づけられております。しかしよく考えてみると、実にトリヴィアルなものに過ぎないのです。それがあとまで続いて印象づけられております。⁽³¹⁾

さて、この座談会の中で、先に触れた長谷川宏の「軍隊ぎらいの感情が、軍隊で出会った異質のもの——丸山眞男のいう『大衆』あるいは『国民』——にたいする知的理解を封じてはいはしないか」という疑問ないし批判につながる発言が出てきた。軍隊体験がある人ならば「日本が軍隊を持つことはまっぴらだという、全人間的な反発感情があるのが、当然」というものだが、この発言を理解するために、その直前に次のように述べていることに注目したい。

日本は独立国家である以上軍備を持つべきだということを物のわかつているインテリでも言うのですが、そういうことを言う人は、第一、現代戦争を昔の戦争のカテゴリで考えている人だし、第二に、そういう人はおそらく日本の軍隊に入つて悲惨な体験をしなかつた人じゃないかと疑うんです。⁽³²⁾

「現代戦争」は「昔の戦争」とは異なるものだという認識と軍隊での「悲惨な体験」という二つの要素が丸山の戦争観、軍隊観において重要な位置を占めていることがうかがい知れよう。丸山は一九四九年十二月号『人間』で作家の高見順と「インテリゲンツィアと歴史的立場」と題する対談しているが、その中で次のように述べている。

ゲーテが『メンシユハイト（人類）』というものはない、メンシエン（人々）があるだけだ』と言っている。

ところが、とかくプロセスという考え方は、物事を巨視的にだけ見るからメンシユハイトの方になってしまふ。人類あるいはプロレタリアートに一足飛びにゆく。ひとひとりのプロレタリアエル、あるいは『汝の隣人を愛せ』という隣人ですね、そういう具体的な目の前にある人間にたいする愛情が基底になってこそ、運動が地につくんですが……いつの間にか抽象的になってしまい、そこに現実の人間にたいするおしつけがましい態度が出てくる⁽³³⁾

これは同じ箇所での「政治は人間をマスとして捉えますからね」という言葉とも呼応しているが、これまで聞いてきた軍隊についての丸山の話もこれに当てはまるのではないだろうか。さらに丸山の話に耳を傾けていこう。

講和条約の発効から六年余りが過ぎた一九五八年、丸山は、宇佐美英治、宗左近、曾根元吉、橋川文三、安川定男、矢内原伊作と「戦争と同時代——戦後の精神にかせられたもの——」という座談会に出席した(『同時代』第八号)。この中で丸山は、先に引用した「ぼくはやっぱり軍隊ほどこいやなところはなかったというよりほかない」と発言しているほか、戦争中の体験を具体的に述べている。敗戦については実に醒めた気持ちで受けとめた。再度引用しよう。

いま愛知大学にいる副島種典さんが上等兵で別の隊にいましたが、八月の十六日から十七日ごろに顔を合せて、『どうも悲しそうな顔をしなければならぬのは辛いね』と話し合ったのをおぼえています。事実の通り、当時の気持を語れっていわれたらそういふよりないんです。⁽³⁴⁾

この発言を竹内洋は、「戦争に命を賭けた人々には冒瀆的言辭であり、一般の国民感情ともちがってはいた」と批判している⁽³⁵⁾。終戦を迎えた日、かつて肅軍演説、反軍演説で名を馳せた斎藤隆夫は「やるべからざる戦争をやつて大敗を招いた」と軍と政府の無能ぶりに憤りを表し、やがて左派社会党を率いることになる鈴木茂三郎は「街頭で手放しで泣いた」という。首相を経験した後、再軍備論の急先鋒となる芦田均も「危く泣出さむとして声を飲んだ」と日記に綴つた⁽³⁶⁾。個性の違いに加えて世代も違い、したがって戦争体験も大きく違う。一兵卒として軍隊に入った丸山にとって、自身の軍隊体験は次のようなものだったにすぎない。

べつに何の抵抗をしたわけじゃないし、それどころか、一種の二重人格みたいな生活をしていたんですから、今思い出しても自分の姿はみじめなものです。ああいうメカニズムの中で、自分のなかにある浅ましいもの、いやらしいものをいろんな形でマザマザと実感したことが、マア、しいていえばいい体験だったということになるでしょうね。⁽³⁷⁾

正直ではあるのだろうが、実にそつけない回想であり、かつ、きわめて個人的体験にとどまっている。そのことと関係があるのだろうが、次の回想も当時の丸山の気分をよく表しているように思われる。

兵隊でいながら、傍観者的というか、つまり痛切に日本の敗北を自分のこととして悲しむ気になれなかつた。簡単にいえば、やつと救われたという気持、ワーツと思ひ切りのびをしたい気持⁽³⁸⁾でした。

丸山にとって敗戦は他人事だったのである。そのため、その後も醒めた目で周囲を見ていた。

戦争から帰ってきてしばらく——一九四五年一ぱいぐらいまでの自分の感じっていうのは、むしろ反時的だったですね。猫もしゃくしも民主革命といってワァワァいう気分⁽³⁹⁾に反感をもっていた。(中略)八月十五日直後の解き放たれたような自由感が、復員してから後の世の中を見ているうちに、こういう気分⁽³⁹⁾に変わって行った。あまり進歩的じゃなかったな。

丸山の個人的体験を語った右のような発言と異なり、軍事問題の見通しを語った次の話にも耳を傾けよう。丸山は今後の戦争における核兵器の役割を重く見ており、他方で、その対極にある民兵を重視するのである。

〔軍備は〕僕は中途半端なものがなくなって上昇と下降の過程をとると思うんです。つまり人民公社的な形は下降なんです。根本は民兵制度で、マン・パワーというより、人民そのものを武装させるといって考え。これはどんなに戦争技術が発達しても強みを發揮できる。市民の自己武装はフランス革命からある考え方ですね。本来、国民皆兵だってそういう意味も持つて出てきたわけですね。結局、徴兵制という形で上から利用されてきたけど。人民の自己武装、そういう方向をとる限り、プリミティブな武器⁽⁴⁰⁾でもいいわけですよ。それから他方は非常に高度な核兵器と。その中間の軍備はだんだん意味を失っちゃう。

核兵器と民兵の「中間」とは、通常兵器で武装した国民軍ということになる。そして民兵に「二つの意味」を見いだしている。「外国の侵略に対して人民が戦う意味と、政治権力に対して人民の抵抗権をいざという時に発動する意味」である。「ぼくはむしろ今のそのような軍備をやるぐらいなら、鉄砲かピストルをみんなに配れという主張」であり、「それがいわゆる『まる裸』論に対する答にもなる」のだ⁽⁴¹⁾という。

(次号へ続く)

注

- (1) 荏部直『丸山眞男——リベラリストの肖像』(岩波書店、二〇〇六年)、三ページ。
- (2) 「丸山眞男手帖の会」への入会を同会の代表から勧められた佐高信は、同会を「丸山を神格化する動き」であるとして、「偶像崇拜的なものを感じ」て断ったという。中野雄『丸山眞男 人生の対話』(文藝春秋、二〇一〇年)、一〇〇—一〇一ページ。エドワード・サイデンステッカーも丸山の『現代政治の思想と行動』への書評のなかで「丸山教団の法皇」といった表現を用いている。New Leader, vol.47, no.3, 1964. 同「日本の不謬ならざる法皇」丸山眞男『後衛の位置から——』『現代政治の思想と行動』追補——(未来社、一九八二年)、一四六ページ。筆者からみれば、中野・前掲書も全編「丸山礼賛」で覆い尽くされている。丸山が神格化されるプロセスについて竹内洋が興味深い分析をおこなっている。同『丸山眞男の時代——大学・知識人・ジャーナリズム』(中央公論社、二〇〇五年)、第三章。
- (3) 「戦後思想史の中の平和論——再軍備問題を中心に——」『思想』第九六〇号(二〇〇五年一月)、一憲法の平和主義と終わらない『戦後』同時代史学芸編『日本国憲法の同時代史』(日本経済評論社、二〇〇七年)。本稿では、平和論とは、軍備によって自国の安全を確保しようとする伝統的な安全保障を超えようとする考え方であり、日本国憲法第九条の規定もあって、戦後の日本で少なくとも一時期大きく支持を集めた志向を指すものとする。したがって、勢力均衡や核抑止などいわゆる「力による平和」論は平和論とは捉えないこととする。
- (4) 竹内・前掲書に「丸山眞男を題名にした邦語書籍」の一覧がある。それによれば、一九六三年から二〇〇五年までに四十五冊が出版されている。同書、一九ページ。その後も出版されていることはいうまでもない。筆者が把握しているだけでも数冊あり、荏部・前掲書をはじめ、重要なものも少なくない。
- (5) 吉本隆明は「思想家というには、あまりにやせこけた、筋ばかりの人間像がたっている。学者というには、あまりに生々しい問題意識をつらぬいている人間の像がたっている。かれは思想家でもなければ、政治思想史の学者でもない」と丸山

を描いている。同「丸山眞男論」『吉本隆明全著作集』第十二巻(勁草書房、一九六九年)、五ページ。

(6) 長谷川宏「丸山眞男をどう読むか」(講談社、二〇〇一年)、二七ページ。

(7) 同前、二五ページ。出典は「丸山眞男座談」第一冊(岩波書店、一九九八年)、二八〇ページ。以下、「座談」一」の要領で略記する。

(8) 長谷川、前掲書、二六ページ。出典は「座談」二、二〇三ページ。同じことを後にも言っている。『朝日ジャーナル』一九五八年八月九日号、『座談』三、二九八ページ。

(9) 「軍隊の居心地がよかったというような話」とは、矢内原伊作の「軍隊というのはやっぱりいいんだな。ぼくは好きだな」という発言を受けてのことである。『座談』二、二〇九ページ。

(10) 長谷川、前掲書、三一ページ。

(11) 荏部、前掲書、三ページ。

(12) 中野、前掲書、一二二ページ。このほか、『ユリイカ』(一九七八年三月)に掲載された埴谷雄高との対談でも「のっけから丸山眞男の能弁が話題に」なったほどだという。同書、六三ページ。埴谷とともに竹内好を訪れた丸山が「しゃべり続けてようやく息をつぎ、そこに竹内が『そうかね』と重々しく答えるのは、『数十分後』のことである。もちろんそこで語り終わることなく、……」という逸話が残っている。荏部、前掲書、一一九―一二〇ページ。アメリカで丸山の講演を聞いた竹内洋も、「わたしを含めた一〇人ほどの日本人参加者は丸山を囲んで芝生で談話する機会をもった。ほとんど丸山の独演会状態で、巷間いわれていたおしゃべり好きな丸山像を再認した」という。竹内、前掲書、二〇三ページ。

(13) 『丸山眞男書簡集』第二巻(みすず書房、二〇〇四年)、一八八ページ。丸山自身も座談会の中で、「私はおしゃべりだから、ついひとりでしゃべっちゃう」と言っている。『座談』四、四一ページ。

(14) 荏部、前掲書、一三〇ページ。

(15) 松本健一「丸山眞男 八・一五革命伝説」(河出書房新社、二〇〇三年)、七七、七九ページ。

(16) 「夜店と本店と」『座談』九、二八七ページ。丸山は自身についてこう語っている。「ぼくの精神史は、方法的にはマルクス主義との格闘の歴史だし、対象的には天皇制の精神構造との格闘の歴史だった」。『座談』二、一三四ページ。したがって、

丸山が戦争や平和について求められる以上のものを残さなかったことには十分な理由があるといえる。

(17) 梅本克己・佐藤昇・丸山真男『現代日本の革新思想』（河出書房、一九六六年）一九七一―一九八ページ。この発言は多くの論者が問題視している。たとえば、竹内、前掲書、二九四―二九五ページ。

(18) 吉本隆明「革命的空語の変質」『日本』一九六六年四月号、竹内洋、前掲書、二九五ページより再引用。竹内はこれに続けて、「傷つくほどにも自己存在を賭けたこともない特権を社会的に享受していることが、この男にとっては何にか自慢のたねになっているらしい「ごまんな心理」という吉本の指摘を引用しつつ、丸山のそうした「下司びた心情」があったからこそ、「超国家主義の論理と心理」にはじまる日本社会論が書けた」としている。同前、二九六ページ。「帝大教授は馬鹿ばかりそろっている」と言ってはばからなかった長谷川如是閑を師と仰いだ丸山のまったく別の一面がここに現れている。丸山は後年、長谷川の影響もあって、「帝大の助教授になっても、何らの幻想はもなかった」としているが、この発言は言葉通りには受け取りがたいものとなろう。『丸山真男集』第十六卷（山岩波書店、一九九六年）、一九二ページ。竹内洋も、「丸山にとって大学教授というより東大教授であることが偉いものだというのは無意識どころか意識化されていたようにおもえる」と指摘している。竹内、前掲書、二九七―三〇四ページ。丸山のエリート意識の強さと在野知識人嫌いは際立っていたというべきであろう。果たしてこのような丸山の意識は、平和論とは無縁のものであろうか。

(19) 『丸山真男座談』を利用して国際関係に関する丸山の言説を分析したものに、水谷三公『丸山真男——ある時代の肖像』（筑摩書房、二〇〇四年）第三章があり、すぐれた丸山論を展開しているが、筆者の問題意識とはやや異なるものである。

(20) 『座談』一、一六七ページ。

(21) 同前、一七三ページ。

(22) 同前、一六九ページ。

(23) 同前、一七二ページ。

(24) 同前、一八三ページ。

(25) 同前、一八三ページ。

(26) 同前、二五七ページ。

- (27) 同前、二五八ページ。ただし、丸山は「日本の最近のウルトラ・ナショナリズムが明治以後の国家ないし社会体制の必然的な発展として出てきたもの」と見ており、その連続性ないし因果関係を認めている。同、二六六ページ。
- (28) 同前、二五八ページ。
- (29) 同前、二六〇ページ。
- (30) 同前、二七二ページ。
- (31) 同前、二七五ページ。
- (32) 同前、二八〇ページ。
- (33) 同前、二九六―二九七ページ。
- (34) 「戦争と同時代」『座談』二、二〇三ページ。
- (35) 竹内、前掲書、一〇〇―一〇一ページ。
- (36) 齋藤隆夫先生顕彰会編『齋藤隆夫政治論集』（新人物往来社、一九九四年）、二六二ページ、鈴木茂三郎『ある社会主義者の半生』（文藝春秋新社、一九五八年）、二四四ページ、新藤栄一・下河辺元春編『芦田均日記』第一卷（岩波書店、一九八六年）、四七ページ。引用にあたって漢字及び仮名遣いを現在のものに改めた。
- (37) 「戦争と同時代」『座談』二、二二二ページ。
- (38) 「現代はいかなる時代か」『朝日ジャーナル』一九五九年八月九日号、『座談』三、二九八ページ。
- (39) 『座談』二、二二六ページ。
- (40) 「二年の後、十年の後——黄金の六〇年代か、危機の六〇年代か——」『週間読書人』一九六〇年二月一日号、『座談』四、一一ページ。
- (41) 同前、一一―一二ページ。